
ある朝、天使が舞い降りて

SatukiAon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある朝、天使が舞い降りて

【Nコード】

N2398V

【作者名】

S a t u k i A o n

【あらすじ】

目覚めると、妹の背中に翼が生えていた。そこへ予言の御子を迎えに来たという異世界人まで現れて――？

いわゆる普通のお兄ちゃんが、妹を守ろうとがんばる話。でも妹萌え要素とかないのでご注意ください。

【01】ある朝、天使が舞い降りて

その日の朝はけたたましい悲鳴からはじまった。

目覚まし時計が鳴り出す五分前。

寝起きに響いたその声に驚いて、啓孝は勢いでベッドから転がり落ちた。

「……っ」

発生源はすぐにわかった。

啓孝はむっすりと顔をしかめながら起き上がった。枕元の眼鏡を掴み取って装着。寝巻きのまま廊下へ出ると、右隣の部屋の前に立って軽くノックする。

返事はなかった。

もう一度ノックをして、今度は返事を待たずにドアを開けた。

「入るぞ」

中はまだ遮光カーテンがひかれたままで、薄暗かった。部屋は一目で見渡せる広さしかなく、ベッドの上が不自然に盛り上がっているのもすぐにわかった。どうやら部屋の主が、頭から布団をかぶって座り込んでいるらしい。

「なにやってるんだ、結美^{ゆづみ}？」

声をかけると、びくつと大げさなくらい布団が震えた。それ以上の応えはなく、啓孝は窓に近寄りカーテンを開け放った。空は抜けるように青かった。昨夜の雨で隣近所の屋根や道路が湿っている。庭木の葉にもまだ名残の滴が残っていた。

啓孝はまぶしげに目を細めて、ベッドを振り返った。

「さっきの声はなんだったんだ？ どうせ変な夢でも見て寝ぼけたんだろうけど、きつと隣近所にも聞こえたぞ」

ため息をつきながら眼鏡のブリッジを押し上げる。すると、もぞ

もぞと小山が動いて結美がひよこつと顔をのぞかせた。

「あ、兄い……」

妹はなぜか涙声だった。

「なんだよ……？」

そのときになって初めて啓孝は気がついた。結美のからだを覆う布団の膨らみが、明らかに大きいことに。首から下をきつちり覆い隠した布団は、背中側だけが変に山なりになっている。まるで二人羽織でもしているかのようだ。

そう考えて、啓孝の思考がふと逆回転し始めた。清々しい朝の静寂を切り裂いた悲痛な悲鳴、布団から出てこない妹と頬を濡らす涙の理由――。

ひとつひとつを反芻し、一瞬で弾きだされた答えに啓孝はわなないた。

「おま……結美！　その中にいるのは誰だ！　いつのまにそんな……」

結美はぼかんと啓孝を見返した。そしてすぐその意味を理解して、かつと頬を上気させた。

「や、そんなわけないじゃん！　兄いのばか！　へんたい！」

さっきの涙はどこへいったのか、結美は前のめりになって抗議してきた。

「なに考えてんの、ほんとにもういやらしいな！」

「な……じゃあ、なんなんだよソレは！」

耳を赤くした啓孝がムキになって布団の膨らみを指差すと、結美はうつと言葉につまった。急にしおらしくなって、上目遣いに啓孝をうかがう。

「……お、驚かないでね？」

「は？」

「いいから、驚かないって約束して！」

「……わかった。約束するよ」

よくわからないまま洪々承諾すると、結美は決心したように大き

く息を吸い込みいつきに布団を剥ぎとった。

間近で鳥がはばたく音が聞こえて、視界が白いもので埋めつくされた。

妹の背中に隠されていたもの。

それは白い翼だった。鳥の羽のように羽毛で覆われた大きな翼に、窓から差し込む朝日が反射して光の粒が舞っている。頭の上に金の輪っかでもついていれば、絵に描いたような天使のできあがりだ。だが結美はちゃんと生きているし、少なくとも昨日の夜まではこんなものはついていなかった。

ベッドの上を占領するように広げられた二枚の翼は、両手を伸ばした幅よりも大きい。

結美は胸の前でもじもじと両手の指を絡ませながら口を尖らせた。

「うー。驚かないって言ったのに……」

「お、驚かないやつがいるか！」

我に返った啓孝が思わず怒鳴ると、結美のからだと一緒に背中の翼も縮こまった。

「……それ、背中から生えてるのか？」

啓孝は近くに寄って、そっと手を伸ばした。むかし飼っていた手乗りインコの羽よりも、ずっと大きくて柔らかい。だが触れた翼には温もりを感じなかった。

「う、うん。たぶん。でもね、パジャマはべつに破けたりしてないんだよ。生地を通り抜けてるみたいで……」

結美は身をよじって背中を覗き込もうとしたが、翼が邪魔だったのかすぐに諦めた。左手を右肩にかけ自らを抱きしめるようにして不安げに呟く。

「これ、なんなのかな。なんかの病気？ あたし、どうしちゃったんだろ」

瞳を潤ませた結美が啓孝を見上げた。

翼が生える病気なんて聞いたこともない。だからと言ってこの状況を説明できるはずもなく。啓孝は困惑の二文字を顔に張りつけた。

「ご心配には及びませんよ」

突然の第三者の声に、二人が部屋の入り口を同時に振り返る。

そこにいた人物を見るなり兄妹は揃って目を奪われた。

——その男は一言で言えば、きれいな顔をした男だった。すつきりした顎のラインや、涼やかな甘さを含んだアーモンド形の瞳、微笑を浮かべる薄い唇が女性的な印象を与える。しかし細身にも見える体は服の上からでもしっかりした骨格をしているのがわかった。裾の長い妙なデザインをした詰襟の服に身を包んだその男の後ろにもうひとり。同じ形の色の違う服を着た男がいた。前の男より頭ひとつ分ほど背が高く、無骨で男らしいがよく見ればこちらも端正な顔立ちをしていることに気づく。無表情だが鋭く切れ上がった目に満ちる強かな眼光と、静かな佇まいはどこか野生の獣を思わせた。

さらにその肩越しには廊下に立つ両親の姿が見えた。休日だから父がこの時間に家にいることはおかしくない。だが口を一文字に引き結んだ父の顔はいつになく険しかった。何かを堪えるように母は口元を両手で隠し、その肩を父に支えられていた。単純にこの事態に驚いているという様子ではない。

「父さん、母さん……？」

状況が把握できず呆然としてみると、男のひとりが妹のもとへ近づき片膝をついた。ベッドの下から稀に見る美形に見上げられ、結美は身を硬くした。

「恐れることはありません。その翼はあなたの生来のものなのですよ」

そう口にした瞬間、男の肩甲骨のあたりがきらきらと輝くのが見えた。そして瞬きをする間にそこに白い翼が出現した。結美と同じ天使の羽だ。

驚きすぎて声も出ない啓孝の脳裏を直感がかすめた。まさかと思
い視線を走らせると、片割れの男と目が合った。男が軽く目を伏せ
ると、こちらの心情を読み取ったかのように、その背にまたしても
純白の大きな翼が現れた――。

【01】ある朝、天使が舞い降りて（後書き）

連載二作目。前作よりも少しはレベルアップしてるといいなあ……。月一か隔月で更新していく予定なので、最後まで読んでいただけたらすごく嬉しいです。

【02】妹の秘密

十数年前、啓孝は事故で命を落としかけたことがあった。

そのとき両親の前に二人の天使が舞い降りて、啓孝の命を救ってくれたのだという。幼いころ、啓孝はそんな話を幾度となく聞かされていた。

——その天使がいま、啓孝の目の前にいた。

一階の間取りを広く取っている対面式キッチンを備えたリビングダイニング。その中央に置かれたローテーブルを挟んで向かい側——ソファーに浅く腰掛けている髪も目も肌の色さえ薄い色彩で構成されたその男はフェノンと名乗った。歳は結美と同じだと聞いたが物腰が落ち着いているせいか、とても大人びて見える。話し方も丁寧な姿勢を崩さない。見目も麗しく、白い翼を背負う姿はまさに天使像そのものだ。

しかし彼は天の御使いなどではなかった。

「じゃあ、結美はあんたたちと同じ異世界人だっていうのか」

啓孝は隣に座っている結美を横目に見やった。結美は膝の上のせた両手を握りしめて、さっきから一言も口をきかずにつつむいていた。なんとなく背中の中翼も力なくうなだれているように見える。改めて見ても信じられない光景だった。

「驚かれるのも無理はないと思います。ですが、その翼がなにより証拠。ユーミリシエリア様は間違いなく我々の世界でお生まれになった我らの同胞にして、希望の御子です」

ユーミリシエリア。それが結美が生まれたときに授かった真名だとフェノンは誇らしげに語った。

十数年前——瀕死の息子を抱えた両親の前に現れた天使は、ある契約を持ちかけた。一も二もなくそれを受け入れた両親が縋るよう

な思いで伸ばした両手に託されたのは、白くやわらかな布地に包まれた啓孝よりも小さな女の子だった。

息子の命を助ける代わりに、その子を守り育てること。

それが啓孝の両親が天使と交わした契約だった。その後、女の子は両親の娘として育てられ、十六年が経とうとしている。

「ユーミリシエリア様はまもなく生まれ持った本来のお姿を取り戻されます。翼が現れたのはその徴。そうなればすぐに我々とともに故郷へお帰りいただけるようになります」

「で？ おまえたちは結美を連れていつてどうするつもりなんだ？ ここには家族も友達もいるんだぞ。たったひとりで見知らぬところに連れて行かれて、結美が喜ぶとも思ってるのか」

異世界人だと言われようが血の繋がりがなかるうが、物心のついたときから結美は啓孝の妹だ。いきなり家族を引き渡せと言われて簡単に承諾できるわけがない。啓孝はフェノンに向き直り挑むような目で言った。

しかしフェノンは啓孝の厳しい視線にも怯まなかった。

「さきほど申し上げたとおり、ユーミリシエリア様は生れ落ちた瞬間に、我々の世界で百年続く争いに終止符をうつと予言を受けた選ばれたお方です。ユーミリシエリア様が故郷に帰られることはいわば必然。この世界でお育ちになられたのは、成人まで健やかに過ごしていただくためです。この家に預けられたのは単なる偶然にすぎません」

「ずいぶん言いようだな。先に結美を手放したのはそつちだろ。そんなに大事なら、なんでおまえたちが守ってやらなかったんだよ。いまさら現れて返せっていうのは都合良すぎるんじゃないか」

「——っ」

苛立ちを含んだ啓孝の言葉に、落ち着き払っていたフェノンの顔が初めて崩れた。嫌なところを突かれたのか下唇を噛んでわずかに顎をひく。

「それは……仕方がなかったのです。当時の戦況はとても危うく抜

き差しならぬ状態で、ユーミリシエリア様をお守りすることができなかったのです。ですが、できるのならこの手でユーミリシエリア様をお守りしたいと誰もが思っていたはずです。いえ、思っていました。別の世界に御身を隠すことは苦渋の、」

「あたし、そんなの知らない」

フェノンを遮った低い呟きは啓孝のすぐ隣から聞こえた。俯けていた顔を上げて結美はフェノンをぎっと睨んだ。

「ユーミリシエリア様——」

「あたしの名前は結美だもん。そんなユーミなんとかなんて名前じゃない」

やっと反応を示した結美にフェノンが一瞬の緩みを見せた。しかし結美の否定の言葉を聞いてすぐに表情を改めた。

「いいえ。あなたはユーミシエリア様です。俺とセオはあなたのこととをずっと前から知っています。だから俺たちが迎えに来たんです。多くの仲間があなたの帰りを待っています。ともに故郷へ帰りましょう」

ユーミリシエリア様、と名前を呼ぶフェノンの声は啓孝と話しているときよりも、ずっと親愛に満ちていた。見つめる眼差しは真摯で甘い。騎士が主にそうするように、いまにも片膝について手を差し延べそうな雰囲気だ。

だが結美はそれを真っ向から拒絶した。多分に幼さの残る丸顔を精いっぱい歪ませて、

「やだっ！ 帰りたいなら勝手に帰ればいいじゃん。ていうか、はやく帰ってよ！ あたしはあんたたちの言うことなんて信じない。一緒になんて絶対、ぜったい行かないからね！」

勢いよく立ち上がると結美はそのまま部屋を飛び出した。足音だけがバタバタと階段を駆け上がり、やがて二階の部屋のドアが力任せに閉められた。

【02】妹の秘密（後書き）

短くてすいません……；

【03】兄の決心

誰もが口を噤み、沈黙がリビングに横たわった。

しばらく結美の出でいった方を見つめていたフェノンは小さく息をついて席を立った。

「諦めたほうがいいんじゃないか？ ああ見えて頑固だからな、一度癪癪を起こした結美は何を言っても聞かないぞ」

「勘違いしないでください。諦めるなどという選択肢は初めからありません」

リビングを出て行こうとしていたフェノンは、肩越しに啓孝を振り返った。その視線がちらりと4人がけの食卓に座る啓孝の両親に移る。

「目的を果たすまで我々はこちらに滞在させていただきます。そちらのお二人からは、すでに承諾を得ていますので」

「はあ？」

「ユーミリシエリア様には何度でも話をします。わかっただけるまで」

にっこりと微笑んで言ったあと、フェノンは一瞬で表情を消した。

「……ユーミリシエリア様にはできるだけご納得された上で、お戻りになってほしいと思っています。ですが、どうしてもそれが儘ならないというのであれば、無理にでもお帰りいただきます」

「あ、おい！」

二度目の制止は届かなかった。フェノンは振り返ることなく今度こそリビングから姿を消した。

啓孝は短く嘆息してソファから腰を上げた。

「……あいつ、綺麗な顔してるくせに意外と頑固そうだな」

誰にでもなく呟いて縁なしの眼鏡を片手で押し上げる。それから啓孝はずっと気になっていたことを口にした。

「で、父さんたちはなんでさつきからずっと黙ってるの？」

食卓に肘をついて額を覆ったまま微動だにしない父。向かい合わせに座っている母は、もともと細い肩をさらに小さくして声をかけるのも躊躇われるほど悄然としていた。

啓孝と結美がフェノンから話を聞いているときも、両親は一言も口を挟まなかった。それどころか今朝から一度も目を合わそうとしない。まるで何かから目を逸らそうとしているかのように。

啓孝の胸にじわりと嫌な熱がこもった。

「さつきの、あいつが言ってた承諾ってどういうこと？ まさか結美を異世界とやらに連れて行くことを許したわけじゃないよね」

啓孝は否定の言葉を待った。だが父は貝のように口を噤んだ。沈黙は肯定。理由はわからないが、両親は結美を引き渡すことを同意している。理解したとたん、頬に熱が集中するのがわかった。後頭部がじんと痺れる。

「なんだよそれ……。返せって言われて、そんなあっさり受け入れるの？ 結美は家族なんじゃないのかよ。それとも父さんたちはそう思ってたってわけ？」

「——それは違うっ」

戸惑いと失望が入り混じった低い呟きに、父は弾かれるように顔を上げた。啓孝と向き合い、苦しげに顔を歪める。

「俺たちは家族だ。血の繋がりがあろうとなかろうと関係ない。啓孝も結美も父さんと母さんの子だよ。むしろ血の繋がりが無いなんて、今日まで忘れていたくらいなんだ……」

それだけは信じてほしいと、父は語尾を震わせた。

「だったら！ 二人ともなんでそんな顔してるんだよ！」

苛立ちを含んだ啓孝の声に視界の端で母の肩がびくりと震えた。伏せた顔にいつもの穏やかで明るい笑顔は見られない。父と同じようにこの世の終わりのような顔をしている。

「家族だって言うならそんなふうに黙ってないで、いますぐあいつを追い出せばいいじゃないか」

何もおかしいとは言っていない。おかしいのは突然やってきて結美を引き渡せなどというフェノンと、それになんの抵抗もみせない両親の方だ。

「あんな勝手な話に大人しく従おうなんてどうかしてるっ」

「——他人の娘と実の息子の命。秤にかけるまでもないことだろう」
なおも父親に詰め寄ろうとした啓孝を止めたのは、馴染みのない低音だった。

初めて聞いた男の声に驚いて啓孝は目を瞠った。彼の存在をまったく忘れていたのだ。

暗色の服に身を包んだ長身。猫科の獣を思わせるしなやかな体軀。一步外に出れば誰もが振り返りそうな容貌をもちながら、彼は不思議なほど気配を感じさせなかった。男の名はセオ。フェノンと同じ異世界人だが、いまの彼に翼はない。どうやらあれは自分たちの意思で出し入れができる代物らしい。結美の部屋からリビングに移動している間になくなっていった。

両腕を組み壁に軽く背中を預けたセオは、無造作に伸びた髪の毛の奥から啓孝を見据えた。フェノンとは違う鋭い眼光に啓孝は思わず怯んだ。

「……僕の命って、どういう意味だ」

「もともとおまえの命を救うために彼らがした契約は、予言の御子の成人までの養育だ。最初からそれ以上は科していないし、こちらもそれを望んでいない。たとえ他人であれ、長く時を共にすれば情がうつることは想定済みだ。だが彼女の引渡しを拒否するのなら契約は破棄される」

「破棄……？」

セオの眼差しが剣呑な色を伴いわずかに細められた。

「おまえの命はなかったことになる、ということだ」

「な——、はあ!？」

予期せぬ言葉に啓孝はあつけにとられた。これは紛れもなく脅しだ。言うことをきかないなら命を奪うと、彼はそう言っている。し

かしセオの淡々とした口調と感情の見えない表情のせいか、自分の身が危機に直面しているという実感は少しもわからない。だから恐れよりも単純に怒りのほうが勝った。

「血を分けた息子の命を諦める覚悟があるのなら、我らも手を引こう。しかし彼らはそれが利口な選択でないことをよくわかっている」「そう言つて、父さんたちを黙らせたのか。卑怯だろ、そんなの！」「どう受け取られようとかまわない。それが私たちに任された仕事だ」

「何が仕事だよ。結美はまだ十六にもなっていないんだぞ。成人までって約束なら話が違つじやないか」

食つて掛かる勢いの啓孝。

セオは組んでいた腕を下ろし壁から背を離して、まっすぐ啓孝と対面した。

「我らには生まれながらに備わった固有の能力がある。その力が目覚めれば子供は成人として認められる。時期はそれぞれに差異があるが、早ければ生まれて十五年で成人するものもある。翼が現れるのは覚醒の兆しだ。力に目覚めれば予言の御子に施されている術が解かれ、外見も本来の姿に戻る。嫌でもこちらの人間との違いを目の当たりにするだろう」

「……っ」

セオの声には一切の感情が挟まれていなかった。揺らぎのない蒼い湖面を思わせる深く澄んだ声音。小一時間も聞かされていたら、どんな理不尽なことも説得されてしまいそうな不思議な響きを持っていた。父親とも教師や塾の講師とも違う。それは啓孝が初めて聞く種類の声だった。

啓孝は握った拳に力を込めた。そうしなければセオの威光に負けてしまいそうだった。

「——だからって人の命を盾にとるようなやつらに、結美を渡せるわけないだろっ」

「では、どうする」

「契約したのは父さんと母さんであつて、僕はその対象だっただけだ。逆らつたつて契約違反にはならないよな。だから、結美は僕が守る。おまえたちの思い通りには絶対させない」

つかの間、啓孝とセオの視線が絡み合う。

「……好きにするといい」

興味を失つたかのように、先にふと目を逸らせたのはセオの方だった。その眉間に某かの感情が表れていたことに、啓孝が気づくことはなかった。

【04】兄と妹

異世界人に啖呵を切った結美は、そのまま一日部屋に籠りきりになった。憔悴した様子の両親の口数も少なく、たったひとりが姿を見せないだけで家の中は不自然なほど静かな空間となっていた。

結美の部屋の前には朝からずっとフェノンが張りついていて、はじめは何度も部屋の中へ呼びかけていたが、いまは結美が出てくるのを大人しく待っている。まるでどこかの忠犬のようだ。

「おい。夕飯だぞ」

声をかけるとフェノンはきょとんとした顔で啓孝を見返した。言われたことが理解できなかったのか、その顔はとても無防備で年相応に見える。

「夕飯の時間だから下に行けって言ってるんだよ」

そう言っでやると、目を丸くしていたフェノンはわずかに首を傾げて微笑した。

「てつきりあなたには嫌われていると思っていたのですが」

「好かれてるだなんて思うなよ。同じ家の中にいるのに、自分たちだけで食べるわけにはいかないだろ。わざわざおまえたちの分まで作ってるんだから今度はちゃんと食べるよ」

昼にも声をかけたが、そのときは気にするなと言われて引き下がったのだ。本当ならこんなやつらと食卓を囲むのはごめんなのだが、母は彼らの分の食事もありまえのように用意している。たとえ望まない客だったとしても、そこには人数分の食事が並ぶのだ。だから啓孝も彼らを見捨てるわけにはいかなかった。

「ですが、ユーミリシエリア様も朝から何もお召し上がりになっていないでしょう？」

「心配しなくても結美の分は三食ちゃんと残してある。じゃないと、あとでうるさいからな」

こと結美の食べ物に関してのうらみは恐ろしい。以前、冷蔵庫に残っていた母の手作りプリンを啓孝が食べてしまったときは、一週間ほど口をきいてくれなかった。最初の三日は呆れて相手にしなかった啓孝も、四日目からは機嫌をなおすのにほとほと苦勞させられたことがある。

「……わかりました。では、少しの間だけ失礼します」

フェノンは少し迷うようなしぐさを見せたあと、啓孝の横を通りすぎ音も立てずに階段を降りていった。

それを見送ったあと啓孝は自室に戻りドアの鍵を閉めた。そしておもむろに壁際に向かうと、そこにあるキャスター付きの衣類ケースを転がして脇へと移動させた。そのうしろから出てきたのは、隣の部屋へと繋がる引き戸だった。むかしは常に開かれていて、互いの部屋を自由に行き来していたものだ。それがぱたりと使われなくなったのはいつのころだったか。

一息を吐いて、啓孝は意を決して戸を叩いた。

「入るぞ」

返事は待たなかった。戸を開けて一気に妹の部屋へと足を踏み入れる。明かりはついていなかった。それでもカーテンが開いたままの部屋はほのかに明るい。部屋の主は外明かりに照らし出されたベツドの下に座っていた。抱えた膝の上に頭をのせて丸まっている。

……変わってないな。

小さいころ、ケンカをすると結美はいつもそうやって部屋の隅で丸くなっていた。昔といまの姿が重なって、啓孝はやれやれと小さく首を振った。

こんなやつが異世界の救世主なんかであるはずがない。昔と何も変わらない。ここにいるのは、勉強嫌いで泣き虫で食い意地の張った、たったひとりの自分の妹だ。

「結美、夕飯も食べないつもりか？」

丸くて小さな頭に向かって啓孝は言葉を落とした。

「おまえが三度の食事を欠かすなんて、天変地異の前触れかな。ま

さか自分の生きている間に、地球が崩壊する日が来るなんて思っ
てなかったけど」

「あにい……」

腰に手をあてて大仰にため息をついてやると、伏せた顔の下から
かすれた声が聞こえた。こちらを見上げた結美の顔は明かりの足り
ない部屋の中ではよく見えない。きっと涙でぐしゃぐしゃになっ
ているのだろう。

結美は啓孝を見つめたままかすかに唇を歪めた。

「あたしと兄い……兄妹なのに顔とかぜんぜん似てないし、勉強だ
って兄いはいつも一番で、周りの人にも似てないねってずっと言
われてきたけどさあ。あつたりまえだよね……。だってホントは
あたしたち兄妹なんかじゃなかったんだもん」

あはは、と結美は感情のともなわなない乾いた笑みを浮かべた。そ
のとたん込み上げてきた嗚咽をこらえようと、唇をかねて顔をそら
す。

「もう兄いなんて呼んだらダメだよ……」

ぐしぐしと鼻をすすする姿に啓孝は深々と息をもらした。

「バーカ」

結美の頭を軽くこづいてベッドの端に腰掛ける。

「いまさら何言ってるんだよ」

「兄い……？」

ほづけた顔をさらす妹に思わず吹き出しそうになりながら、啓孝は
続けた。

「おまえは一緒に過ごした時間より、目に見えない血の繋がりの方
が大事なのか？」

これまではあたりまえに感受していたが、いま改めて思い返せば
よくわかる。両親がどれだけ自分たちを大事にしてくれていたか。
二人はやさしくも厳しくも兄妹わけ隔てない愛情を注いでくれてい
た。たまの休日を家族に費やしてしまう子煩悩な父。子供が熱を出
せば一晩中手を握っていてくれたやさしい母。そんな両親に育てら

れた啓孝と結美には、同じだけの思い出がある。それをひとつひとつ語って聞かせれば、結美の目からまた大粒の涙が転がり落ちた。

「僕とおまえは、赤ん坊のころから同じ屋根の下ですつと一緒に大きくなったんだ。母さんの手料理を食べて、おかずの取り合いになれば二人で父さんに叱られて。これで兄妹じゃないっていうなら、なんだっていうんだよ」

「だって……でもあたし、」

「『でも』も『だって』もない。だいたい、兄妹なのに学校の成績が天と地ほどの差があるのは、僕の努力の賜物であって血の繋がりが無いからとかは関係ないんだぞ？」

「……なんかそれだとあたしが努力してないみたいに聞こえるんだけど」

「ああそっか。努力はしてるよな？ 優秀なお兄様が自分の勉強も後回しにしてみてもやってるわりに、結果は芳しくないんだけど」

おどけるように肩をすくめると、結美の頬がてきめんに膨れた。

「兄い、それ言いすぎ！」

「はは、元気になったな」

笑いながらぽんぽんと頭を叩いてやると、結美ははっとなって啓孝をみつめた。瞬きをする目じりからは、もう涙の気配が消えている。

振り上げていた腕を下ろした結美は、またしゅんとなつてうつむいた。

「ごめん、兄い。心配かけて」

「別におまえが謝ることじゃないさ。驚いたのは僕も同じだしな」
実際、寝起きから驚きの連続で感覚が鈍ってしまったほどだ。

「それに諸悪の根源は、勝手なことを言ってひとの家を引っ掻き回したあいっつらだろ」

「……あたし、あの人たちと帰らなくちゃいけないのかなあ」

「帰るってどこへ帰るつもりだよ。おまえの家はここだよ」

「でも、お父さんたちはそう思っただけじゃないのかもしれない……」

結美も両親の様子には気がついていたらしい。そしておそらく――啓孝がそうだったように――その理由を勘違いしている。また暗く沈みそうになる結美に、啓孝はすばやく言葉を返した。

「父さんたちは、恩があるからあいづらに強く言えないだけさ。一応、命の恩人らしいからな。僕の」

両親が黙っていたのは息子の命を人質に取られているからだ、などという馬鹿な話はもちろんしない。知ったらきつと結美は自らフエノンたちに従うだろう。自分の存在が結美を追い詰める。そんなことは絶対にしたくなかった。

「……」

啓孝の言葉に納得できなかったのか、結美は立てた膝に顎をのせて黙り込んでしまった。小さく唇を突きだして眉間にしわを寄せたその顔は、まるで小さな子が拗ねているように見えた。実際、拗ねているのだろう。高校生にもなつて、なんて子供っぽい。

「おまえな、父さんたちの気持ちも考えてみる」

啓孝は小さく息をついて、結美に問いかけた。

「父さんたちがいままで本当のことを言わなかったのは、なんでだと思う？ おまえがこんなふうに傷つくのがわかってたからだよ。父さんも母さんもおまえのこと大事だと思ってるよ。そうじゃなかったらあんな顔、するわけないよな？」

そう言い聞かせる声は、自分でも驚くほどやさしい声音になった。床に座る妹の後頭部を黙って見下ろしていると、やがて「……うん」と小さく返事があつた。

そしてほつと息をつく間もなく、

「あたし、もう考えるのやめる！」

がばりと頭を起こし、結美は力強く宣言した。

「たとえ翼が生えてても、あたしはこの家の子で兄いの妹！ それは何があつても変わらないよね？」

「あ、ああ」

こちらを振り返り、勢い込んで身を乗り出してきた結美に押され、

啓孝はこくこくと頷いた。

結美は何かをふっきったように、いつもの明るさを取り戻していた。目を丸くしながら頷く啓孝を見ると、結美は「んっ」と、満足げな笑顔を見せた。

「あー。珍しくいっぱい考えごとしたらお腹空いちゃったな」

結美は立ち上がって大きく伸びをすると、啓孝があっけにとられている間にドアへと向かった。ノブに手をかけて、

「ありがとうね、兄い」

肩越しに礼を言い置くと結美は足取りも軽く部屋を出て行った。

「……なんなんだよ、あいつはもう」

残された啓孝は肩を落としてひとりごちた。指で眼鏡のブリッジを押し上げると、口から漏れたのは安堵の息だ。自然と口元もゆるむ。

「ホント、世話の焼ける妹だよ」

ベッドから立ち上がり、啓孝は妹のあとを追って家族の待つ食卓へと向かった。

【05】衝撃の事実？

「……はあ」

鞆を置いて席に着いた途端、無意識に強張っていた両肩から余計な力が抜け落ちた。なんととはなしに教室を見渡し、二日前と何ひとつ変わらない風景に安堵する。いつもはわずらわしく感じることもある喧騒さえ今日は妙に懐かしい気さえした。昨日から希薄になっていた現実感がやっと戻ってきたような気がして、啓孝は吐き出した息の分だけ新たな空気を吸い込んだ。

「よお。どうしたんだよ、朝から物憂げなため息なんかついて。アンニユイキャラにクラスチェンジか？」

感慨にふけていた啓孝に、後ろの席からからかい混じりに声をかけてきた。

「……それ意味わかって言ってるか？ ちょっと寝不足なだけだよ」

「へえ。めずらしいな。もしかして課題に手こずった？」

「まさか。あれぐらいどうってことないさ」

「さつすが学年一の秀才様は言うことが違うねえ。んじゃ、あとで見せてくれな」

「丸写しだとバレる。この間みたいに僕までとばっちりを食うのはごめんだからな」

「わかってるって。——んで、課題じゃないなら寝不足の原因ってのはなんなんだ？」

何気なく問われた一言に、啓孝の頬がわずかにひきつる。

「……別に。夕べは、妹の勉強を見てやってたんだよ」

できるだけ平静を装って、啓孝は半分ウソをついた。妹につきあっていたのはその通りだが、何も勉強を見てやっていたわけではないのだ。

——昨夜、部屋から出てきた結美はすっかり自分のペースを取り戻していた。残しておいた朝昼晩の食事をひとりであいらげる姿には、さすがに異世界人も絶句。箸が使えないフェノンとセオは、フオークを持つ手を止めて結美の食べっぷりに見入っていた。

食欲を満たした結美は、次に翼が邪魔で寝返りもうてないからなんとかしてほしいと、フェノンたちに訴えた。背中に翼を背負っていては確かに安眠はできないだろう。それに翌日には学校だってある。異世界人の二人がそうしているように翼をどこかに隠せる方法があるなら、啓孝もそれには賛成だった。

彼らは結美の申し出を快諾した。フェノンに至っては険悪だった結美が自分から近づいてきたことがよほど嬉しかったのか、人が変わったのかと思うほど相好が崩れていた。

いわく、彼らの翼は各々の内なる力が具現化したものだという。それを自分のものとして意識すれば、翼の出し入れも手足を動かすがごとく自由自在となる、らしい。

かくして翼をコントロールするための実習が始まり三時間。

翼は相変わらずその形を保ったままだった。結美はもともと頭で考えるより思ったことを素直に行動にうつせる性格だ。論理的な啓孝よりもずっと直感的なものに優れている。それでも潜在能力を自覚し制御するというのは想像以上に難しいことのようにだった。例えるなら手を使わずに髪の毛を逆立ててみると言われているようなものらしい。

癩癩を起こしかける結美を何度も宥めすかし、啓孝は根気よく付き添った。もちろん同じ家の中とはいえ妹を異世界人と一対一にさせておけないからだ。手出しのできない両親に代わって結美を守ると決めたのだ。目を離れたすきに連れ去られたりしてはたまらない。結局、啓孝が自室に戻れたのは深夜を大幅に過ぎてからだった。

そして今朝、家を出るまえにまた一騒動があった。

学校に行くと言った結美をフェノンが強く引き留めたのだ。彼は外は危険だと言って結美の手を離そうとしなかった。初めはいき

なり何を言い出すのかと結美も啓孝と一緒に呆気にとられていた。しかし遅刻ギリギリの時間になっても行くなダメだとしつこく食い下がるフェノンに、ついに結美が爆発。

「いますぐ手を離さないと、セクハラで訴えるからねっ！もしこれで遅刻したらフェノンとは一生口きかない！」

まるで小学生並みの脅し文句だが、結美の剣幕に怯んだのかフェノンはようやく引き下がった。手が離れた瞬間、結美はフェノンの横を通りすぎ、すばやく啓孝の手をとって玄關に向かった。啓孝が肩越しに振り返ると、結美を無言で見送るフェノンの眉間には言葉にならない憂いが滲んでいた。

「ああ、あの子な——」

意味深な笑みを見せたクラスメイトに、啓孝は落としたけ溜息を飲み込んだ。

「そっぴいや秀才様の妹なのに、なぜか勉強はお得意じゃないんだっつたよなあ？」

「ああ……まあ、あいつは勉強よりも食い気だから。いつまでも子供っぽくて困るよ」

「そいつはどうか。この間、見たぞ。先輩から告白されてんの」

「……はあ！？」

予想外の話に喉から思わず素っ頓狂な音が飛び出す。一瞬クラス目の目がいつせいに集まって、啓孝は慌てて声を落とした。

「こ、告白って。冗談だろそれ。そんな素振りまったくなかった」

「いやマジだって。それだけ場慣れてるってことじゃねーの？」

相当モテてるみたいだし？」

驚きすぎて開いた口が塞がらない。誰が何に慣れてるって？

モテてるってどこの誰が？あの朝昼晩の食事をまとめ食いするよな色気のかけらもない結美が？いやいやそんなバカなと啓孝は首を振った。ある意味、結美が異世界人だと言われたときより衝撃的な話だ。

クラスメイトは動揺する啓孝を面白そうに覗き込んで、

「無愛想な兄と違ってかわいいもんな、妹ちゃんは。ていうか、外も中也全然似てねえし。ホントに血い繋がってんのかよ」

兄妹なのに似ていない。

昔から何度となく言われ続けてきた台詞だ。いまさらどうというともない。にもかかわらず啓孝の胸はどきりと跳ねた。

結美が本当は血の繋がりのない異世界人であることを知っているのは家族だけ。そうとわかっていても、すべてを見透かしているような気がして啓孝は浮き足立った。

「なあ……」

ふと真顔になるクラスメイト。啓孝は何を言われるかと内心身構えた。

「……なんだよ」

「妹萌え」とかなんないの？」

「なるか！」

本日二度目。教室の端まで届いた啓孝の声は、またもクラス中の注目を集めることになった。

——昼休み。

空になった弁当箱の包みを丁寧に結びなおしていると、

「なあなあなあ！」

クラスメイトが声を弾ませ近づいてきた。

「妹ちゃん、また呼び出されたみたいだぞ」

「はあ？　呼び出されたって誰に？」

わざわざ腰をかがめて耳打ちをされた啓孝は、怪訝な顔で相手に向き直った。

「さあな。相手の顔は見なかったけど、さつき特舎の方へ行くの見たんだよ。あそこは昼休み人も少ないからな。そんな場所に連れ

立っていくつてことは、だ」

「……なんだっていうんだよ」

「何って告白タイムに決まってるんだろ？」

「こ……っ」

それ以外に何かあるか？ と真面目な顔で返されて啓孝は言葉を詰まらせた。

妹が異性に人気があるらしいという話を聞いたのは今朝のこと。その衝撃も覚めやらぬうちに、告白イベントが発生するとは思わなかった。どうやら結美がモテるといのは本当らしい。啓孝にとって結美は妹以外の何者でもない。だから家族以外の異性に好意を寄せられている姿がどうにも想像がつかない。自分にはまったく縁のない類の話だからなおさら。啓孝は衝撃を隠せなかった。

「気になる？」

にやにやと見下ろしてくる視線に気がつき啓孝は逃れるように目をそらした。空の弁当箱を鞆の奥に突っ込み、椅子を引いて立ち上がる。

「お。やっぱり覗きに行くんか？」

「飲み物買いに行くんだよっ」

しつこいクラスメイトを一睨みして啓孝は教室をあとにした。

がこん。という音を伴って四角い紙パックが転がり落ちた。取り出し口からそれを拾い上げ、思わず呻く。手にしたパッケージはピンクと白の縞模様。表面にはかわいらしい文字で「イチゴみるく」練乳仕立て」とプリントされていた。自販機のディスプレイに目をやると、買うつもりでいた商品の真上にそれは鎮座していた。つまりはボタンを押し間違えたのだ。げんなりとため息を落とし、啓孝はその場を離れた。

何やってるんだ、まったく……。

手の中のものをもてあましながら胸中でひとりごちる。

どうにも昨日から感情が波立っているという自覚はあったが、

まさか妹の恋愛事情に動揺するなんて。まったくもって、らしくない。

眉間に刻まれた縦皺を押し隠すように片手で眼鏡を押し上げた。廊下の窓の向こうには特舎と呼ばれる別棟が見える。音楽室や実習室などの特別教室がおさまるその棟には、いつでも立ち入ることが出来る。しかし各教室は鍵がかかっていて許可なく使用することとはできない。だからこの昼休みに生徒の姿はほとんどないと言っている。

ふと、啓孝の脳裏に昨夜のフェノンの言葉がよみがえった。

苦勞の末、翼をおさえることに成功してはしゃいでいた結美に彼が言ったのだ。完全に覚醒していない力は不安定で、コントロール自体に不馴れないまの状態だと、ふいに感情が高まったとき翼が出現してしまうかもしれない、と。

それは子供が感情的になってつい手や足を出してしまうのと同じく似ている。

啓孝は一抹の不安を覚えた。

そうでなくても日頃から子供っぽくて感情的な行動をする結美だ。告白などされて、はたして冷静でいられるのだろうか……。

足が止まり、視線が特棟の方に固定される。

「様子……見に行った方がいいよな」

小さく呟いて、啓孝は早足で歩き出した。

【05】衝撃の事実？（後書き）

はやくも月一更新崩壊。

更新分は出来上がっていたんですが、UP作業すっかり忘れてました；

【06】静かな火花

渡り廊下を抜け特棟に入ると、思ったとおり人の気配はしなかった。

結美はどこにいるのだろう。

啓孝は上階から順に見て回ることにした。階段をのぼりきったところで視線を巡らすと、廊下の突き当たり——音楽室の引き戸が少しだけ開いているのが見えた。

啓孝は息をのみ、足音を立てないように一步一步、教室に近づいた。引き戸の窓からそつと室内をうかがう。

整然と並べられた机の向こうに、五線譜の書かれた黒板と閉じたグランドピアノが見えた。そして黒板と机に挟まれたスペースに女子生徒がひとり。こちらに背を向けて立っていた。後ろ姿だが、それが結美であることはすぐにわかった。音楽室の後方にある入り口からは、ほぼ教室内が見通せるようになっていた。結美の他に人影はない。相手の男はもう戻ったのだろうか。

啓孝が首を傾げると、それが合図だったかのように結美が突然こちらを振り返った。

「あき兄!？」

「——っ!？」

啓孝の顔を見た結美の目が真ん丸に見開かれる。啓孝も同じような顔で結美を見返した。

「びつくりしたあ。何やってんの、あき兄」

入っただけでよと手招きされて、啓孝はややバツの悪い思いで音楽室の戸を開いた。

「あき兄、次の時間ここなの？」

「あ、いや……違」

いくら心配だったからとはいえ、まさか妹の告白現場を覗きに来たとはとても言えない。

返答に困って口ごもった啓孝をよそに、結美は首を傾け兄の手を覗き込んだ。

「あれ？ あき兄、何持ってたの？」

言われて啓孝は自分がこの場を切り抜ける切り札を持っていたことを思い出した。

「ゆ、結美！ これやるよっ」

「え。うそ、いいの？ やったあ！」

目の前に差し出されたものを見ると、結美の顔がぱつと輝いた。それを手にした結美はさっそくストローをさして中身を飲み始める。「あまーい」と叫びながらもう一口。頬はゆるゆる。ご満悦の顔だ。しあわせに浸っている結美の様子はいつもとなんら変わらない。本当に告白などされたのだろうか。

とっさに差し出したイチゴみるくで、その場を誤魔化せたことをほつとしつつ、啓孝は慎重に結美の様子をうかがった。

「あー……と、ところで、おまえはひとりで何してたんだよ。こんなところで」

結美が目だけで「ん？」と啓孝を見返した。だがストローを咥えた口が開くまえに、

「アキタカさん」

「うわっ！」

突然、耳元でささやかれて啓孝は文字通り飛び上がった。

振り向くと、そこには穏やかな笑みを浮かべたフェノンが立っていた。

「おまえっ……… どうか湧いて出たんだ！」

「俺はずっとユーミリシエリア様のお傍にいましたよ。今朝からずっと」

「……フェノン」

にっこりと微笑むフェノンを結美が横目で睨んだ。

「あ。えっと——ユーミ様、ですね」

イチゴみるくを片手にすむ少女に、フェノンは困ったように眉根を下げた。いつのまにか呼び方に訂正が入れられたらしい。それでも彼には確固たる従属の意思があるのだろう。結美はそれが気に入らない様子だ。様付けもやめて言ってるのに！ と、丸い肩をいからせている。

「おまえ、なんで学校までついてきてるんだよ。誰かに見つかったら大騒ぎになるぞ」

翼こそ発現していないが、どこかの隊服を思わせる特殊な服装と彼のムダにキラキラした容姿は人目を惹きまくるに違いない。フェノンは見るからに浮世離れしているのだ。

だがフェノンはいたってまじめな顔できっぱりと言い切った。

「心配はご無用です。俺のことは誰も気にしませんから」

「あのな、自分が目立ってるって自覚はないのか？」

「そういう術をかけているんですよ。アキタさんも、声をかけられるまで俺の存在に気がつかなかったでしょう？」

「術……？」

胡散臭い単語に啓孝は思わず眉をひそめた。しかしその意味を理解すると今度は大きく目を見開く。

廊下から室内を覗いたとき、中にいたのは確かに結美ひとりだった。これだけ派手な男を見逃していたはずはない。いまだって肩がふれあうほどすぐそばまで接近されていたのに、まったく気がつかなかったのだ。これは異世界人の某かの力が働いていたと考えた方が自然だ。

「……どこかに隠れていた、とかじゃないんだな？」

「ええ。もちろん。そういう面倒なことを回避するための術ですから」

「あき兄、それホントみたいだよ。だって午前中ずっと教室の後ろに立ってたのに、誰もフェノンに気がつかなかったもん。ここに来るまでだってそうだったし、なんか不思議っていうより気持ち悪かったよ」

結美が飲み終えた紙パックを小さく折りたたみながら言う。

「でね、名前呼ばれるとフェノンのこと分かるようになるんだってけど、最初そんなの知らないからさ、あたし普通にフェノンと喋ってて、みんなにすごいドン引きされたんだよ！」

結美が頬を膨らますと、フェノンは笑い混じりにすいませんと軽く頭を下げた。そのやりとりがずいぶんと気安いものに見えて啓孝の目が半眼になる。

「つまり、その術を使えば相手に知られず朝から晩までべったり張りついていられるってわけだ。プライベートも何もあつたもんじゃないな」

「え。なんかヤダそれ。変態っぽい」

「護衛などでこの術を使う場合は、対象者に自分の存在を知らせるのが原則なので大丈夫ですよ。それにユーミ様は声をかけるまえから俺の気配を感じていたでしょう？」

露骨に嫌な顔して半身を遠ざけた結美に、フェノンがやんわりと微笑んだ。

彼を見返す丸い瞳がまじろぐ。結美は何かを思い返すようなしぐさをしたあと、そうかもと呟いた。

「あ、でもホントになんとなくだよ？　なんとなく！」

「なんとなくでも、気がついていたのなら十分です。それはユーミ様の性質ですよ」

「せーしつ？」

「はい。覚醒まえなので確かとは言えませんが、ユーミ様は見通しの力をお持ちなのだと思います」

「みとーし？」

問いかけながら右に左に首を傾げる結美に、フェノンはおかしそくに目を細めた。

「いまかけている術は自分の姿を隠すのではなく、他人に気にされなくなるといふものなんです。声をかけたり触れたりしなければ、相手にとってそこにいないのと同じになる。見通しの力というのは、

そういつた術による誤魔化しが通用しないんです。ああいえ、たんに勘がいいのとはまた少し違うのですが……。でもそうですね、直感的にものごとの本質をとらえることに優れた性質なのだと考えていただければいいかと」

フェノンは分かりやすい説明をしたつもりだろうが「へー。そうなんだあ」と頷く結美の顔は空々しいまでの笑顔だ。きつと言われた内容の半分も理解していない。勉強を教えてやっているとき結美はよくそんな顔をしている。要約すればフェノンの術は視覚ではなく意識的なものに作用するもので、結美は先天的にその術が効きにくい体質ということだ。

「セオみたいに普段から気配を消すのが上手ければ、もっと気づかれにくくなると思うのですが、俺はそういうのは得意ではないので」そう、はにかむように言ってからフェノンは啓孝と目を向けた。

「ですから、安心してください。ユーミ様に悟られないようべつたり張りつくなんて、俺にはできませんよ」

緩やかに。形のいい唇がカーブを描く。さっきの皮肉のけん制か。その目が笑っていないことくらいはすぐにわかった。

啓孝は眼鏡の奥から半眼フェノンを見返した。

「ねえ。そういえばそのセオは？ いる感じはしないけど、うちで留守番？」

自分の両手をしげしげと見つめていた結美が、ふと顔を上げて頭上の火花をあつさりと断ち切る。

啓孝もそこで初めてもう一人の異世界人の姿がないことに気がついた。あの感情の読み取れない静かな眼差しを思い出して、なんとなく窓際のあたりを見渡してしまう。

「いいえ。もちろんセオも一緒に来ていますよ。いまの時間は人が多いので、どこか人気がないところで待機してると思います。セオは俺と違って人目を避ける術は使えないですからね」

「え。なんで？」

「性質の違いです。持っている性質によって行使できる術というの

は限られているんですよ。だから逆に、彼にできて俺にできないこともたくさんあります。むしろ俺にできることなんてごくわずかなんですが」

「そうなんだ。じゃあ誰でも使えるってわけじゃないんだ。ちょっと楽しそうだなと思ったのに」

結美は残念そうに唇を尖らせた。

「でもユーミさまの見通しの力は希少なんですよ。セオもきつと驚くと思います」

「えーホントにいい？ セオが驚いてる顔ってなんか想像できないなあ」

パタパタと手を振りながら、結美はまるで友達と雑談しているかのように屈託なく笑った。昨日はあんなにへこんでいたくせに。昔から、一度気を許すと打ち解けるまでが異常に早いのだ。人懐こいといえいまはその警戒心のなさに腹が立つ。

「結美、あんまりそいつらに気を許すなよ」

思ったよりも低い声が出た。結美には急に兄の機嫌が悪くなったように見えたのだろう。案の定、何もわかってない様子できょとんと瞬いた。

「忘れたのか。そいつらの目的がなんなのか」

「わ、わすれてないよ！ でもあたし別の世界のことなんて知らないし、行く気なんて全然ないもん。フェノンたちと普通に話するくらいいいじゃん」

「おまえにその気がなくなつて、無理やり連れて行くこともできるだろ。妙な術だつて使えるんだし、学校までついてきたのだから、僕の見えないところでおまえを連れ去る魂胆かもしれないじゃないか。なんでそのぐらいのこと考えないんだよ。おまえは無防備すぎる」

「だ、だつて……」

「ユーミ様を責めるのはやめてください」

たじろぐ結美をかばうようにフェノンが口を挟んだ。

「仮にアキタさんの仰るようなことをしたとも意味はありません。本来の姿を取り戻していないユーミ様は故郷に繋がるゲートを通ることができないと、昨日もお話したはずです。俺はユーミ様の護衛としてお傍にいますだけですよ」

「何が護衛だ。百年も不毛な争いをしてるそっちの世界じゃどうだか知らないけど、ここにはおまえが心配するような危険なんてそうそう転がっちゃいない。今日半日でも校内いたなら、その必要がないのくらいもうわかっただろ」

「確かにこの世界は驚くほど平和です。ここに集まる者たちの顔を見れば、彼らが無害であることもわかります」

ですが――と、フェノンが言い繋ごうとしたとき、スピーカーから機械的な鐘の音が鳴り響いた。昼休みの終わりを告げる合図だ。そしてそれは午後の授業が始まる五分前の知らせでもある。

「戻るぞ、結美。授業に遅れる。ここの鍵返しに行くんだろ」

「え？ あ、うん！ でも……」

頷きながら結美は兄とフェノンを見比べた。

何かを言いかけていたフェノンは結美と目が合うとやさしく微笑んで、

「行きましょう、ユーミ様」

と、結美をうながした。

このときのフェノンが何を言おうとしていたのか。どうせまた非常識なことだろうと啓孝は思っていた。だからわざと会話を終わらせたのだ。

啓孝がそれを聞かずに音楽室から出てしまったことを後悔するのは、それから二日後のことだった。

【06】静かな火花（後書き）

ようやく半分くらいまで来ました。
来年も引き続きよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2398v/>

ある朝、天使が舞い降りて

2011年12月31日20時48分発行